

提言「ピースおおさかのリニューアルに向けて」

24.5.16 府市統合本部特別顧問 橋爪 伸也

1. 課題の所在

【議会等の意見、指摘等】

- ・展示に対する批判……「残酷」、「偏向」、「自虐的」
「加害と被害の両面を展示」との評価もあり
- ・展示に対する要望……「命の大切さ」、「警察、消防、自衛隊の活動」
- ・コスト論（運営費、維持補修費、リニューアル経費）
- ・そもそも論……行政が関与して、独立の施設を設けて展示しなければならないものか
- ・運営形態の見直し……今の運営法人は脆弱、大阪の文化施設等を一体運営するという枠組みの中に加えるべき
- ・施設の設置目的が不明確

【都市魅力戦略会議での意見】

- ・平和教育のために今、このような施設が要るのか。リニューアルありきではなく、多様な選択肢を考えてみるべき
- ・平和学習施設と「都市魅力」というのは両立しにくい
- ・見せ方は大いに工夫が必要
- ・展示だけではない、「センター」機能が必要

2. 基本的な考え方

目的、対象、展示、活動、組織を白紙から見直す

- ・第二次世界大戦後の冷戦時代における「平和教育」の場ではなく、21世紀のグローバル社会で活躍する子どもたちが、日本と世界の近現代史についての理解を深め、平和の重要性を自ら考える機会を提供する場とする
- ・国際観光拠点である大阪城エリアにあって、他施設とも強く連携し、海外からの集客機能を強化する
- ・運営組織のあり方は、抜本的に見直す

3. 見直しの方向性

3-1. ミッションを再構築

【従来のミッション……曖昧】

戦争の悲惨さ・平和の尊さを次の世代に伝え、平和首都大阪の実現を目指して世界平和に貢献する

【新たなミッション……明確化】

- *大阪空襲の記憶は風化させることなく、惨禍を次世代に伝えるとともに、1万人以上に及ぶ非戦闘員の犠牲を追悼する機能を維持する
- さらに、その背景となる明治維新から先の大戦に至るまでの我が国の歴史を、日本と世界両方の視点から提示する
- ・国際紛争なども含めて、グローバル社会における様々なリスクを府民・市民に提示する
- ・子どもたちも含めて府民・市民が、命を守り、平和を創っていく力をいかに養うのか、自ら考える機会を提供する

3-2. ターゲットを再設定

【従来のターゲット】

「全方位的」、言い方を変えれば「不明確」

【ターゲットの明確化】

- ①「次代を担う大阪の子どもたち」と「戦争の悲惨さ・平和の尊さを語り継ぐべき大人」
- ②大阪を訪問する他府県の方々………基本は有料
- ③インバウンドの観光客

3-3. 展示のリニューアル

【従来の展示の問題点】

- ・「残酷、自虐的な展示」、「加害と被害の両面から展示」と、両論の評価〔B展〕
- ・戦争に至った背景が理解できるような展示になっていない〔B展〕
- ・詰め込み過ぎ〔B展〕
- ・展示の意図が伝わっているか、疑問〔C展〕
- ・展示物の劣化(照明焼け、剥がれ)、陳腐化(展示手法、装置が20年前のまま)
- ・施設の老朽化(雨漏り)

【新たな展示の考え方】

- ・展示手法と内容において、次のリニューアルの機会まで陳腐化しない本質的な展示に腐心する
- ・再現展示の強化、映像展示の更新による「体験型展示」へと刷新する
- ・明治時代の対外的な戦争から先の大戦までの経緯、さらには大阪空襲に至る日本・世界の動きを取り上げるなど、戦争の背景が理解できる展示とする
- ・冷戦終結後、今日に至る紛争・戦争と私たちの関わり合いを明示する
- ・核兵器、地域紛争、貧困、飢餓、環境破壊、自然災害、領土問題、資源を巡る紛争など、現在における世界の平和を脅かす課題を客観的かつ立体的に提示する
- ・知識を伝えるだけでなく、平和に向けて頑張る道筋、頑張る姿(警察、消防、自衛隊など)を示す
- ・世界で活躍する国際的なNPO・NGO、国連の活動等を紹介し、将来、そういう水準の平和活動をしたいと思う子どもが出てくるような展示とする

※学習指導要領に沿った展示、平易な解説に留意する

※(日本と相手国とで)見解が分かれる事象については、学説を逸脱しない範囲で『両論併記』、有識者の意見を幅広く聴く

※「刻の庭」は大阪空襲死没者鎮魂と平和の誓いの場として、より充実を図る

3-4. 活動の見直し

【従来の活動】

- ・大阪城エリアという地の利を生かした集客策が不足。また、単独の集客策で拮据りに欠ける(戦跡ウォークは月1回、ピースおおさかだけで実施)
- ・講堂を大阪府・府内市町村の行事にしか利用させていない
- ・企画事業は財団理事や市民ボランティアの協力で何とか続けているのが実情

【新たな活動】

- ・国際観光拠点である大阪城エリアの一角を担う施設として
 - ・ 歴博や天守閣との連携を図る
 - ・ イベントの開催など講堂の利活用を図る
- ・大阪城周辺の戦跡などを体験学習の場及び観光資源としてきちんと位置付け、ボランティアガイドによるツアーや修学旅行の誘致などを強化する
- ・映画やテレビドラマのロケ誘致への協力なども積極的に行う
- ・学校における平和教育との連携を強化する
- ・外部資金を獲得できるような体制、大学や国際機関との連携も必要

3-5. 運営組織のリセット

【従来の組織の課題】

- ・府市とは別の財団ということで、運営、展示などについてガバナンスが不十分
- ・現在の財団は事務局体制や収支構造において脆弱

【新たな組織】

- ・当面、財団の目的に新たなミッションを明記。並行して、新たなミッションを効率的・効果的に遂行できるよう、新たな運営組織を検討
- ・将来的には、広域自治体である新たな大都市組織(大阪都)が施設の所管を担当することを想定

ピースおおさかのあり方検討会(24.4.17) まとめ

なぜあの場所でなければならないのか、現在のミッション/いま行政が抱える意味、「ミュージアム」ではなく「センター」としてこう生まれ変わるという説明が必要。
ゼロベースの案を用意し、私（橋爪）から市長/知事に説明する。

提言「ピースおおさかのリニューアルに向けて」 市長/知事レク(24.4.27)

【橋下市長】AM

- 運営主体である財団の目的がはっきりしていないと、いくらリニューアルのコンセプトを作ってもダメ。リバティおおさかは時間をかけたが、寄附行為の目的規定を変えなかったのがダメだった。
- 安かろう悪かろうではダメ。料金を払ってでも見てもらえるものに。収支差補填ではやる気がなくなる。(運営主体に)努力してもらおう仕組みが必要。
- 近現代史は重要であるにもかかわらず、しっかりと教えられていない。大阪空襲を伝えることは重要だが、それだけでは小さい。そこに至る時代の流れ等も伝えないと。
- 全体コンセプトは知事・市長で決めて、具体の展示内容については、両方の立場の有識者の意見を聴く。一つの意見だけを取り上げると失敗しやすい。学説から逸脱しない範囲で主張する(両論併記)。戦略的には、海外に日本の主張を発信する(喧嘩ではない)。金をかけてもよい。

【松井知事】PM

- 極論を含め、両論併記というのはよい。
- リバティおおさかへの補助は止める。命の大切さなどはピースおおさかの趣旨とも共通するので、ピースおおさかで展示できないか。
- 今の場所にあることが大事。近現代博物館にはできないか？大阪城/歴史博物館/ピースのトライアングルで利用してもらえないか？

“近現代史博物館”についての市長/知事発言

【橋下市長】

- 自分は近現代史をきちんと教えてもらっていない。数十億円をかけて近現代史歴史教育館(仮称)を作り、両方の歴史観を学べる館を作りたい。(5/9 リバティおおさかについて府教委レク時)
- 必要なのは日本の近現代史をしっかりと学ぶ教育館。両論併記でいきたい。中国、ロシア、韓国が何に対して怒っているのか、知らないとい国際関係を築けない。今の教育に不満を持っているので、政治が館を作る。金をかけても、任期中に完成させたい。(ピースおおさかの)リニューアルではなく、一回ゼロにして新しいモノを作る。ハコも新しいものを作るかどうか。メンバーに集まっていたいで一から考えたい。(5/11 登庁時)
- 都市魅力戦略会議の方で近現代史教育館の案を、部局の方ではリバティおおさか/ピースおおさかのリニューアルの案を考え、どれを採択するか、知事と決めていきたい。(5/14 府市統合本部会議時)

【松井知事】

リバティおおさかの今の展示では、巨額の税金投入は府民の理解を得られない。人権はしっかり守っていくという必要な部分は、例えばピースおおさかと一体化させ、近現代博物館的な施設、親がお金を出しても子どもに勉強に行かせたいというような施設にしたいと思っている。(5/9 定例記者会見での発言)

24.5.16 「ピースおおさか」のあり方検討会 議事概要

- ・ピースおおさかの展示の一部リニューアルではなく、近現代の歴史の博物館について都市魅力戦略会議で議論せよということ。
- ・「ピースおおさか」が近現代史教育を担う上で4つの論点が挙げられる。まずは多くの人、子どもたちあるいは都市生活者の皆さんに、気軽に行って、何か大切なものを見つめなおす場と機会をどう提供するか。2つ目にはミュージアムガイド等で市民が運営にどう参加するか。3つ目には特に多様な展示企画のために大阪に関する新たな資料をどう収集するか。4つ目は演劇公演など多彩な表現形態により当事者の想いをどう伝承していくか。
- ・両論併記というのは非常におもしろいアイデア。フォーラムとしての博物館というビジョンがあって、ある特定の考え方を称揚していくタイプの博物館ではなくて、多様な異なる考え方が交錯していくようなフォーラム。フォーラムとしての博物館は論争的なテーマ、非常に難しいテーマに関してむしろ有効。
- ・センターというのをフォーラムというように置き換えて、来館者が博物館と一緒に考えるような仕掛けを作るというのは、すでに色々なところで実践が行われているし、近現代の歴史的評価の難しい時期に、それが大阪でできたら、結構すごいかなと思った。
- ・現代の日本があるのはやはり近代、だいたいペリーが来航したころまできちんと歴史をさかのぼって見ないと今日の姿は分からない。なぜこんな戦争をしたのかというのは、今学校で全然教えていないはず。それを考えさせる場として、ここで価値観を強要するのではなく、ここが議論し考えるフォーラムになっていくという意味では、非常に重要な機関になりえる。
- ・(ピースに) どういう展示があってどれくらいのスペースが必要かをどこかで見ていただかないと。そのうえで議論してピースの建物を使えるのか、集約して新しいものを作るのかが見えてくるのでは。それがないと次の案が出しにくい。
- ・近現代史博物館を本気でやるのであれば、それを検討するための予算。具体的なA・B・C案くらいまでをだして。
- ・数十億円の大きなものか、ピースおおさかかどっちかしかないのでは。
- ・A案・B案・C案など各論を示すとしても、大きな考え方を示す。